

第41号  
2019・6・9発行  
金光教教学研究

## 「男」の問題と「女」のリアリティ

所長 大林 浩治



まずは、高橋富枝が伝えるこんな話から。

九月の秋祭の時、教祖のもとには少々お客がありました。魚を買ってきた妻のとせは、早く夕飯を出そうと立ち働いています。つい不足が出てしまいました。「二人の者をつかまえて朝からまだ話をしておつてじゃ。早う切り上げて魚の一つも切つて下さればよいに」。

そんな中、教祖は便所に入ったのですが、どうしたはずみか、小便壺の中に逆さに落ちてしまいました。とせは、急いで着物を川へ持って行って洗うなど、大忙しです。そこへご裁伝が下がりました。

「親類が大切なか、氏子が大切なか、神には考えがあつて教えをしておるに、それを不足に思

う。命を助けられた恩は忘れて不足に思うから、余計に手がかかるぞ」と。

ご裁伝で言われていることはわかります。取次にあたつている教祖が手伝つてくれないからといって不足に思つてはダメつてことぐらい。でも、私は、そうした受けとめに居心地悪くなつてしまうのです。なので、そんな私の思いを正直に声にしてみますね。

「いや、これつてアウトでしょ!」

この声を、教祖に届けていいのか、神に届けていいのか。よくわかりませんが、居心地悪さは、こんな思いを伴っています。「取次が大事だからといって、なぜこういう取り上げかたになるの?汚した着物も、結局は奥さんに洗わせているんだよねえ。自分の粗相を棚に上げて神の言葉でしかりつけるなんて、かえつて神の乱用になるんじゃない?」

もちろん、不足の心に向けて教えが下がった、そのことは大事でしょう。でも私は、そう受けとめる手前で、もつともつと見ておかねばならないものがあるぞ!つて思つてしまうのです。

そう思う理由は、教祖についての語り口に付きものの「教祖は偉いお方だ(ありがたや〜)」とか、「教祖の夫婦関係は理想的(♡☺♡)!!」といったイメージとはかけ離れた、リアルな人間生活が語られていることにあります。そしてそれは、ご裁伝が下がったことはさておいて、現代

でも見かけられるほどにリアルなのです。

このように、この話は、あたかも目の前でくり広げられたのだと見ておかしくないほどに、教祖夫婦の人間関係を捉えています。これを伝えていのが高橋富枝ですから、私たちはそれと知らずに彼女のリアリティを共にすることになつている、とも言えるでしょう。

そもそもなぜこの話がリアルに感じられるかといえば、「人つて、そうしたことに当面しながら生きてるんだ」という「そうしたこと」を、この話は切り取つて伝えてくれているからでしょう。しかし、そうであれば、「そうしたこと」は、決して見過ごされてはならないぞ!つて思うのです。

ここでの「そうしたこと」とは何でしょうか?ズバリ「男」の問題です。あるいは「女」に働く抑圧の問題と言い換えてもいいでしょう。そしてそれこそは、「女」のリアリティが見させてくれたものなのです。

「女」に働く抑圧は、「男」を居丈高にさせていますが、しかしその分「男」は情けない姿をさらしています。しかもそのことに「男」は気づいていません。抑圧は、そうしたかたちで「男」の自覚にも働いているようです。

いま、教学研究上に、ジェンダー論を組み入れた試みが始められようとしています。が、それはさておきというか、そのところというか、見

定めておきたいのは、とせの不足を富枝が直接聞いていて、そしてそれを、ご裁伝を頂き伝える教祖の姿に組み込んで話しているということ。それは、「男」のなかに生きる日常のなかで、「不足に思うな」との教えを取り組み、徹底させて、信じることの価値見定めが試されていたことを示すのではないのでしょうか。そしてそこに、とせや富枝という「女」のリアリティがつかまえた信心を見る気がします。

「男」としての教祖に不満がましいことは言われていません。だからこそ、いっそうに「女」がどのように信心を求め、生きようとしたのか、そのことを考えさせられます。そこからは、抑圧に無自覚なまま生きていく「男」を恥じ入りさせ、たじろがせるほどの迫力を見ることができるとは思いません。さらに言えるのは、このような信心の力は、「男」だとか「女」だとかのジェンダーカテゴリーに規定されている私たちの生き方を明るみにし、揺さぶり続けるものではないでしょうか。

(兵庫・出石教会)



登録有形文化財登録証伝達式(2月)

## ◆令和元年度の計画◆

本年度は、研究生二名及び御用奉仕一名を新たに加え、所長以下、総勢一七名にて出発することとなりました。以下、主な取り組みを紹介いたします。

### 紀要論文講読セミナー

【場所(第一～三回)】金光北ウイング光風館 研修室

【時間(第一～三回)】各日一三・〇〇～一四・三〇頃

これまでの研究成果を全教の皆様と共に学ぶおす機会として、紀要論文講読セミナーを開催します。初めて論文に触れられる方も意識した取りくみです。本年は、四一～五〇号の中から三本の論文を取りあげるとともに、第四回については、交流集会と併せて開催します。

### 〈実施済み〉

【第一回】五月二二日(水) 担当・高橋昌之

竹部弘「お知らせ事覚帳」に見られる「神という経験」(第四二号)

### 〈予定〉

【第二回】七月二二日(月) 担当・堀江道広

加藤実・荒垣寧範「資料論考 浅尾藩領大谷村における氏神祭祀と神職金光河内」(第四七号)

第三回 九月一〇日(火) 担当・白石淳平

大林浩治「『覚帳』『覚書』の神語り世界―金光教の始源的創造力を探る方法的試論―」

(第四六号)

第四回 一一月一〇日(日) 担当・岩崎繁之

※第一三回「教学に関する交流集会」と併せて開催

第五八回教学研究会 <予定>

【場所】金光北ウイングやつなみホール

【日時】六月一四日(金)〜一五日(土)

本年は、第一日に研究発表、第二日には、全体会「信心の今、今の信心―何をどう取り上げ考えるのか―」(発題・コメント・討議)を予定しています。

第一三回教学に関する交流集会 <予定>

【場所】金光北ウイングやつなみホール

【日時】一一月一〇日(日)午後

本年は、紀要論文講読セミナー第四回と併せて、今秋刊行予定の「金光大神事蹟に関する研究資料」の紹介や懇談を行います。霊地在住の方はもちろん、どなたでもご参加頂けます。

第二〇回教学講演会 <予定>

【場所】本部広前会堂西二階

【日時】一二月八日(日)午前

布教功労者報徳祭当日の午前に、紀要五九号の研究成果を題材にした教学講演会を開催します。

○

この他、本年は、「金光大神事蹟に関する研究資料」(立教一六〇年生神金光大神大祭直会)を刊行するとともに、引き続き、他宗教団の教学研究者との交流(教団付置研究所懇話会第一八回年次大会、於中央学術研究所)や、学会・研究会を通じた一般諸学問の研究者との交流を通じて、広く現代の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図ってまいります。また、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図ってまいります。

令和元年度研究題目

<第一部教祖研究>

・肥灰御差し止めの事蹟見返しの諸相

―明治四年における「金光大神年譜帳」起筆との関係から― 所頁 岩崎繁之

・明治期の金光大神と金神

―「暦注略年譜」の様相を手がかりに― 所頁 白石淳平

<第二部教義研究>

・「めぐり」の位相

―信心に関わる言語環境の検討― 所頁 高橋昌之

<第三部教団史研究>

・戦災教会・布教所における復興とその意味 所頁 見山真生

・明治末期の金光教における“社会的結びつき”の諸相 所頁 山田光徳

・明治二〇年代の岡山市域における布教の諸相 ―神道金光教会中島支所を中心に― 所頁 須寄真治



事務室床張替工事(10月)

★提

研究員

西村明正

★言

## 生きる願いを、御用の願いに



教話の御用をしていて、言葉が上滑りしていく時があります。

それまでも話したところのある題材で、その時はしっくりきていたはずなのに、今日はぜんぜんダメだ、という時があるのです。

その時の焦りと言ったらたらないのですが、「シヨウ・マスト・ゴー・オン」。途中でやめるわけにはいかないのです、神様におすがりしながら、どうにかこうにか続けさせていただくしかありません。

恐らくそういう時は、言葉が自分の心から離れてしまっているのでしょう。心の中に確かにあるものから生まれた言葉であっても、時間が経てばその時々的心境とずれていきます。そうして知らないうちに、自分にとって切実な言葉ではなくなっていくのです。「話を使い回すからだ」と言われればそれまでですが、教話の難しさというものをあらためて感じている今日この頃です。

「自分の生きる願いを、いかに御用の願いとさせ

ていただけるか」。ある先輩先生の言葉ですが、教話に限らずすべての御用において、それが私の課題となっています。

この「生きる願い」というのもまた大きな問いであると思います。私は何を願いとして、この生を生きているのでしょうか？ 私の場合、どうもそれは心の奥深くにしまい込まれているようで、取り出すのにとつともない労力を必要とするのです。

作家の村上春樹が、「才能の油田」という話をしています。同じく作家の村上龍と自分を比較しています。「彼(龍)にはナチュラルでパワフルな才能が備わっています。彼の立っている地面のすぐ下には、才能の油田みたいなものが豊かにある。でも僕の場合、その油田はとても深いところにあるので、苦労して掘り下げなくてはなりません。それはとても骨の折れる作業です。そこに着くまでに時間もかかるし、でもいったんそこにたどり着けば、僕は落ち着いて、自信を持って仕事に取り組むことができます。僕の生活はかなりシステム化されています。地中をうまく掘り進むためには、そうする必要があるので」(村上春樹『夢を見るために毎朝僕は目覚めるので』と述べています。

「才能」を「生きる願い」と置き換えれば、私は完全に春樹タイプです。「深い地中からそれを掘り出すためにはシステムが必要だ」という言葉が、私にはよく理解できる気がするのです。村上春樹の場合、たとえば毎朝四時に起きて五時間か六時間執筆

し、午後にはジョギングや水泳で汗を流し、夕方からはゆっくり過ごして、午後九時頃には寝る、というような厳格なルーティンがそのシステムにあたります。私にはまだそこまで洗練されたシステムはないのですが、一つだけ持っているものがあります。

それは「ギター」です。実は、私は金光教師になる前に、シンガーソングライターとして音楽活動をしていました。自分で曲を書き、自分で詞を付け、自分で歌う。そうやって、たくさん曲を作ってきました。作曲する時は、大抵ギターを抱えて口ずさみながら、一音一音、メロディーや言葉を探っていきます。それを三分間のポップ・ソングという型に落とし込んでいくのです。この「ソングライティング」というアート・フォームが、私にとって自分の感情や願いといったものを心の奥深くから汲み出すための強力なツールだったのです。

今、御用生活や信心生活の中で、どうすれば同じようなことができるのか、ということが私の課題となっています。実は、この原稿はギターを弾きながら書きました。「自分の生きる願い」が上手く取り出せていたら、と願います。

そして、もちろんそれは「神様の願い」にかなっていないかならないでしょう。そこまで考えていくと、私にはもう祈るしかないように思います。今日も祈りと共に、ギターを抱えて(いや、ギターは置いておきましょう)、御用と格闘する日々です。

(兵庫・西宮教会)

# 平成三〇年度 研究報告座談会

## 資料を通じて出会っているものとは

日時——平成三二年三月二七日

出席者——山田光徳、須寄真治、森川育子(司会)・

記録)、堀江道広、塩飽望

### 司会—森川



教祖直筆帳面を含む新たな資料群が提供されて四年になります。研究報告や検討会を重ねるごとに、所内において新しい資料に関する情報や認識の共有が進んできたんじゃないでしょうか。それとともに、資料から感じられる疑問や驚きを伴った出会いが、研究所全体を動かしているのを感じています。そこで、ここからの教学研究について、それぞれの体験や感想を手がかりに話合ってみたいと思います。

### 塩飽

まず塩飽さんから、初めての研究報告や検討会の感想や印象を……。取り組んでの感想ですが、「教学研究にする」ということが私にとつての課題になってきました。入所してから、だんだんと教学研究を一般的な研究と違うものとして感じるようになって……。ただ何が違うのかは、はっきりしてないのですが。研究報告は研究者全員が一斉に執筆しますよね。周りの人はみんなごく自然に教学研究に取り組んでいるように見えるので、私もみんなと同じように教学研究をしたいという思いになりました。でも、それは「教学研究

### 堀江



究が分からない」ことへの不安や焦りじゃなく、私自身、金光教と出会って日が浅いこともあるのですが、「分からなさ」の先に面白さがあるように思えて。上手く言葉にならないのですが、研究報告を通じて、より金光教を知っていききたいと思うようになりました。

塩飽さんの感想を聞きながら、こんなことを思い出しました。昨年から金光大神広前での金銭の遣り取りについて記された「金光大神直筆帳面1」(以下、「帳面1」)に取り組んできたんだけど、当初は、何が書かれているか、さっぱりわからず、どうすればいいか悪戦苦闘しながら取り組んでいたんですね。そんな中で、資料によって教祖の新たな事実や未知なるものとの遭遇があるのではないかと思うようになって、何としても読んで

みたいし、分きたいという思いが自分の中で強くなったなあと思っています。今は、一つ一つの内容を確認しながら、資料全体の性格を明らかにしようとしています。それは私がするというより、資料によって自分が動かされている感覚になっていて、この取り組みの先に何かあるのか、大きな楽しみになっています。

### 山田

新しい資料の活用ということでは、白石報告(「金光大神直筆帳面」)うかがう「金神無札」の位相)が興味深かったです。同報告は、「金光大神曆注略年譜」に記されたとせの婚札行事の方違えが、天地金乃神との関係で「無札」と捉えられていることに注目してましたよね。これは「覚書」の当該事蹟や「無札」に関わる先行研究との対照によって浮かんだポイントなんです。このように「覚書」「覚帳」の内容や先行研究と対照することで、今後、新しい資料からうかがえる「新しさ」が明確になると思います。

### 須寄

これまで知られてきたことや先行研究の成果と比べることで明



確になる新しさがあるという指摘ですが、それは少し違うとも言えるかと思います。私は今、「教導指針」という佐藤範雄が明治三八年に行った教会長講習会での講義録に注目しています。この資料は、出版に向けて編集された草稿なのですが、未出版です。研究所はこの草稿をずいぶん前に収集していましたが、これまで

研究活用はされていませんでした。書かれている内容に、教団史的な新事実はほとんどないからだと思います。しかし、そうとして、収集された当時の研究と今とは教団の置かれた環境や課題意識等の違いもあるでしょうし、その違いを意識すると、もの見え方の違いが「新しさ」として感じられるんですね。それは、私にとって、物自体の新旧とは別個に、ものの「新しさ」を感じさせられる体験でした。その意味で、すでに知られている「覚書」や「覚帳」であっても、これから後、「新しさ」として感じられることも起きてくるのではないのでしょうか。

### 塩 飽

私は、今秋刊行予定の「金光大神事蹟に関する研究資料」に関



わって、みんなで資料の解説や注釈を検討する編纂作業に加わってきました。作業に取り組みながら、ふと、「覚書」や「覚帳」が発表される前にはこういう作業が行われたんだなあと思っただけです。いま取り組んでいる編纂作業が、「覚書」や「覚帳」の編纂作業の疑似体験にもなっているのかなあ、何か今、凄いい験をしてるんだなあと思えてきて。

### 堀 江

「覚書」や「覚帳」がすでに「ある」という環境からスタートした者にとっては、どこか「ある」ということが当たり前のよう

なっているんだけど、新しい資料を研究することや、編纂作業に取り組むことが「覚書」や「覚帳」に対する感覚を更新する切っ掛けになれば、見ている世界が広がっていきそうですね。

### 須 寄

それは見ているこちら側、つまり、研究者側の意識であり、感覚の更新と資料の新しさが同期しているということですね。

### 山 田

先ほど須寄君が言った感覚に迫ってくる「新しさ」が、「新しさ」として資料に触れた時に催されるものだと



すれば、教学研究の営み全てはその「新しさ」との出会いだとも言えるよね。この度の研究報告で言えば、高橋報告（「語られた「老い」——信心をめぐる言語環境への問い——）の変遷する教義観の指摘にも感じられるし、私の報告（「教団独立から昭和戦前期における教会廃止、合併の諸要因とその背景——川上郡・吹屋教会を

中心に——）でも、「教会」が人びとの熱願から設立され、やがて役割を終えていく歴史的様相の考察にも味わったものだと思えるなあ。「新しさ」を感じる一方で、では今まで何を知っていたのかという、「当たり前」に思ってきたことが改めて意識させられていてね。教学研究に通底している構えとして、「当たり前」を問い直すということがあると思うんだけど、新しい資料によって、どれだけの「当たり前」に気づけるのか。これからの研究の面白さになってきそうですね。

### 司 会

知った気になっているということでは、大きく言えば「教祖」も何となく知っているものうちに入っていますよね。こう言うと教祖研究の人に怒られるでしょうが（笑）。「教祖」について思う時、「覚書」や「覚帳」に目を向ける以前に、すでに聞いて来たこと、知ってきたことを頼りにしている面があります。新たな資料が、新

たな構えで「覚書」「覚帳」に向かう契機になり、それはある意味初めて「教祖」と出会う経験になるのかもしれないね。その意味では、実際に新しい資料に取り組んでいる教祖研究の人のみならず、研究所全体が同じ楽しみを共有しているのかもしれない。

**山田**

明治末期に「教祖御手記」と呼ばれた「覚書」の内容が知られる前後で、立教年が安政二年から同六年に変わったように、資料の出現によって大きな見直しが行われました。この度の新しい資料によって、何が、どのように見直されるのかはこれからの研究次第でしょうが、今研究所にいる私たちは、何かの前と後を見つければ、今立っている訳です。あるいは、資料から見つけても、最初の人になっていられるとも言える。だからこそ、新しいものが出て来たからといって、新しい方に目を向けるだけでなく、これまでがどういうことだったのかも今まで以上に明らかにし、考えていく必要があると思います。

**司会**

新しいことが分かるというのは怖さもあるのかと思います。教祖とはこうなんだと思っ生きてきた人の、信じてきたものが揺さぶられるような。それは同時に、良くも悪くも、自分たちに都合よく解釈してしまうという可能性とともにあると思います。私たちは、新しい資料を前にして、今出会っているものは何なのか、一層このことに注意深くあらねばならないように思います。それは、教学研究がこれまでこのお道の信心に向けてきた問いを、なお一層問うていくことの大切さでもあるのではないのでしょうか。

今日はありがとうございました。



## 立教百六十年を迎えて

### 立教の原点に立ち帰る

#### — 神様とのお出合いを求めて —

元所長 瀬戸美喜雄



令和元年、本年は日本が新元号に生まれ変わった年、本教にとっても立教百六十年という記念すべき年である。

教祖様が神様の神依さしを受けて、世の難儀な人々を救い助けるため専心取次に従事されることになってより百六十年、どれほどの人々がどれほどの神みかげを取次がれ、救い助けられる歴史をたどって来たことか。まずはその長の歲月、神様がいかほど心痛くだされ、専心取次に当たられた先師達がいかに心血を注いでご苦労ください、救い助けられた人々も身をけずっていかほど信心に打ちこまれたかに思いをいたし、心から御礼を申し上げたい。

ところが、今日の教団・教会の実情は、喜んでばかりはおられない。いや逆に、嘆かわしく心痛

ましめられることばかりである。

本教において、今何が一番問題か。最も心すべきことは、結果取次の衰退であろう。教団としても、施策の中心に「結果取次の充実」を掲げ、それに取り組もうとされている。言うまでもなく、取次には二つのパイプがある。一つは取次を願い出る信者と取次者との間のパイプ、いま一つは取次者と神様との間のパイプである。思うに、前者の信者と取次者との取次のパイプは、今日の教団・教会にあっても、教祖様の残された数々の教えや、各教会の初代以下の教えや神体験の言い伝えを用いる教話によって、なんとかつながっている。

しかし、後者の取次者と神様との間のパイプは、年経り世代が移るにつれて、つながりにくくなっている。神様を如実に実感しつつ取次者から信者にまで御神意が流れこむことは、今日では多く期待できない。

それを教祖様の立教直前の「牛使い」の事蹟を例に引いて考えてみよう。

もし今日、牛使いを息子に譲ることを教会の結界に願ひ出られたとしたらどうか。「今まであなたがけがなく牛使いできたことの御礼を申し、息子さんに無事譲れるようお願いしましょう」と教え諭し、その通りおかげが頂けたら丁寧にお礼申すということとで終り、「お礼」と「お願い」と「おかげのお礼」がパターン化した信心が営まれるのではないか。

ところが教祖様のところでは、神様から「地がうげようがうげまいが、畝が曲ろうが『ままよ』」と思つて任せよ」と厳しいお言葉が下がり、奥様の頼みを受けて一旦教祖様が使いかけをしてやられると牛が大あばれし、教祖様がこれは神様のお知らせと気づかれ、周囲の反対を押し切つて息子さんにさせてみられると牛がおとなしくなった。このことで一家三人、神様のお力を如実に知り、たとえ教祖様が農業から手を引かれても差しかえないと一家の者が確信せしめられた、というおかげの事態が生じたのである。

神様といきいきとした出合いがあり、神様と教祖様の間のパイプが疎通し、人間が常識を捨てて神様に心を向けることのせまりが絶えずあり、そのことにより神様の絶大なお力が出現し、神も助かり取次者も取次がれた人も助かるというおかげが生まれ出ている。これが立教の原点である。私共の考えている信心とおかげとは、迫力とスケールが全く違ふと言わざるを得ない。

各教会の初代といわれる先師達が求め続けられたのも、まさにこのことであつた。今日の教会において、一人でも二人でも、できればこれを読んでくださるあなたも含めて十人が、神様との出会いに改めて取り組んでくだされば、金光教は蘇生する。

私も遅まきながら右のことに心をいたし、朝目がさめれば神様が起こされたものと思い、「ままよ」

と、起きて祈念することになっている。私自身、ちょうど老人期の頻尿をかかえており、早朝一、二回はどうしても目がさめるのである。頻尿のおかげで横着者の私でも新しい信心に取り組ませてもらえている。

(広島・甲山教会)

## 研究所と私

### その先へ向かって

主事 毛利義幸



研究所で御用をさせて頂くようになって、七年目をむかえる。

学院を卒業するに

当たり、「教師子弟の集いや学生会でお世話になった先生と同じように、御本部で御用をさせて頂きたい」という願いを持ち、当時の教務実習生に応募した。教務理事との面談を受けたのだが、なんと結果は教学研究所の資料室であった。面談時、「希望ではない部署であった場合、

どうするか」と問われ「万が一どこであったとしても、とりあえず頑張る」と答えたからだろうが、この結果には「？」が浮かんだ。それは、「なぜここなのか？」ではなく、そもそも「なにをするところなのだろうか？」というものであった。

研究所の資料室の御用。大学院の時に、研究所見学でその話も聞いていたはずではある。しかしながら、正直なところ、まったく覚えていなかった。配属となってしまった以上は頑張るしかない。一方で、教庁配属の同期と「いま、どういう御用をしているか」という話をする際に、資料の事などは話せないため「ただ、ずっとコピーをしている」としか答えられず、皆と比べて「何をやっているのか」と悩み、辞めてしまいたいと思う事もあった。

それでも、どうかこうにか続けさせてもらううちに、気持ちに変化が出だした。きっかけの一つとして、平成二十七年に提供された資料の整理を進めていく中で、教祖直筆とみられる資料に触れることが大きい。一枚一枚丁寧にコピーし、漏れがないか照合し、製本していく。文字通り「触れる」という経験である。そして、そこから、研究者の先生方によって解説が進められ、研究活用されていくのを見た時、「資料が資料となって鼓動をしている」という感覚を得た。自分の担う御用が、大きな働きと結びついた実感に出くわしたとも言えようか。そ

れにより、少しずつ自信が付き責任感が出だしたのか、もっとお役に立ちたいと思えるようになってきたのである。あれほど教庁の御用にあがれていたにもかかわらず、今では、ここで御用を続けたいと願えるようになった。たまに、気が抜けたり弛んだりして「カツ」を頂いているのだが。

最近では、業務コピーを受けた時に、より見やすく、より使い勝手が良くなるよう提案をすることもある。これは、ずっとコピー機を使っているからこそその方法であったり、活用する人が何を求めているのかと考えた時に、より良いあり方を求めるようになったからである。そして、「毛利くんが言うのなら、それで任せろ」と言って貰えた時、自身がお役に立てているのだと実感できる。

研究所の資料は、現在の方が活用するだけでなく、未来の人も活用するものもある。資料室の御用は、その時間の流れを継いでいく要(か)なめ)であると思う。まだまだ足りない部分は多いのだが、一つ一つを積み重ねていき、資料室の御用を通じてお道の御比礼となるよう進んでいきたい。

(香川・丸亀東教会)



## ニユーフェイス



研究生入所式後、洋館玄関前にて  
(前列左から一人おいて末永信野、橋本雄二、所長、金子信栄)

## 研究生

金子 信栄 (福岡・夜須教会)

私は、教会子弟として生まれ、金光教の信心は身近にあり、私が金光教の信心をすることに何の疑問も抱かずに生きてきました。しかし、金光学院に入学し、他宗教研修などを通じて、改めて、私自身が「なぜ金光教の信心をするのか」ということが問われるようになりました。そうして、より金光教の信心について知りたい、学びたいと思い、研究生を志望しました。入所してから日々、様々な論文を読み、また諸先生方と話をすることで、学院生の頃から抱いていたその問いが強く思われるようになりました。それに連なって、なぜ、多くの人々は金光教を求めたのかについて関心を持つようになりました。とりわけ、これまでの金光教の歴史において、様々な難儀を抱える人々のその難儀の具体、そしてそうした人々にとっての助かりとは何であったのかについて考えていきたいと思っています。

## 研究生

橋本 雄二 (京都・伏見教会)

入所してから日々、刺激を受けています。自分とは分らないことがたくさんあるということに感じていましたが、分かった気になっていることもたくさんあるということに気づかされま

す。その時、何かが分かった時とは異質の衝撃を受けるのです。

既に言われていることであっても、それがいかに的確そうであっても、自分の中で改めて問うていってそのように言われる事実に出会わなければ、ゆるい地盤の上に思考を組み立ててしまいかねないと思いました。「今、自分にあるものしか出せないのだから」と潔く諦めて、分からないことをあまり恥と思わず、ありのままの自分であっていくしかないと思っています。

また、自分の言葉で考えを深めていく作業のなんとエネルギーの要ることだろうと思えました。ヘトヘトです。でも少し楽しいです。研究を進めて思考を展開させていきつつ、時には自分が最初に純粹に求めていたものを思い出して、一歩ずつ進んでいきたいです。

## 事務室 (臨時御用奉仕)

末永 信野 (長崎・郷ノ浦教会)

私は昨年まで本部教庁で御用をいただいていたが、研究所の先生方や研究内容などに触れる機会は少なく、実際のことは何も知らない状態でした。このたび事務室の御用にあたらせていただくことになり、所内の行事などを含め、建物の内部のことも初めて知り、御用開始からのこの一週間、驚いてばかりです。教庁とは違

い、研究所独自のやり方があるところにも驚き、生かせる経験もあれば、最初から習わないところからないことも多く、毎日様々なことを教えていただいています。

写真や映像を見ることは好きですが、活字を読むことは苦手な私なので、事務の御用ではありますが、研究所にご縁をいただいたことで、少しでも克服できればありがたいです。これから一つ一つ丁寧に心を込めて、楽しく御用させていただきます。

### ○ 研究資料の刊行 ○

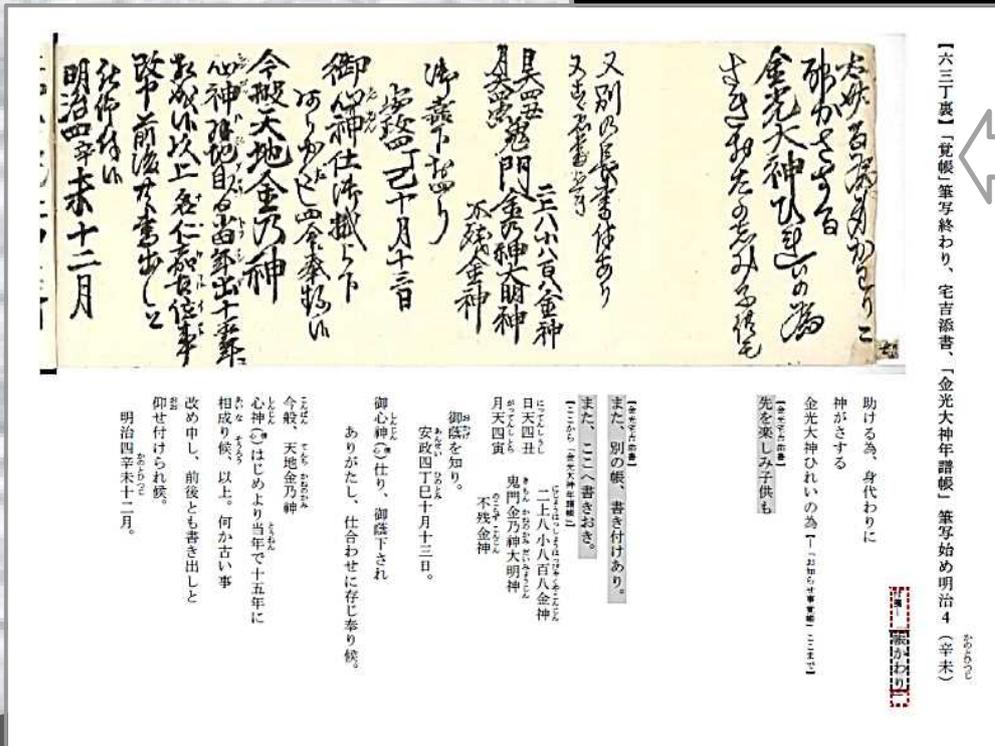
現在本所では、平成二七（二〇一五）年に提供された資料の内、金光大神事蹟に関わる資料の公刊に向け、目下、編集作業を進めています。

本書には、金光大神の出生から帰幽までの内容を所収し、これまで知られていなかった金光大神のエピソードや社会の出来事等も認められる「**金光大神年譜帳**」（金光宅吉筆写帳面）中「別の帳」部分、暦や金神に関わる内容と共に金光大神の略年譜が記された「**金光大神曆注略年譜**」（金光大神直筆帳面3）の他、金光大神事蹟に関してこの度初出となる知見を含む記録類が掲載される予定です。

立教一六〇年生神金光大神大祭にあわせての刊行を予定しております。どうぞ、ご期待下さい！

### 「金光大神事蹟に関する研究資料」(仮) (影印・読み下し文)

内容見本



- ・「金光大神年譜帳」(旧称「別の帳」)
- ・「金光大神曆注略年譜」(旧称「帳面3」)
- ・金光大神記録類
  - ①伊勢参宮に関する記録(金光大神直筆)
  - ②社寺参拝に関する記録(金光大神直筆)
  - ③神葬祭に関する記録(金光宅吉筆写)
  - ④「申し渡しの覚」(金光大神直筆)
  - ⑤「木札1」(金光大神直筆)
  - ⑥「木札2」(金光大神直筆)

掲載予定資料

立教160年生神金光大神大祭  
にあわせて  
配本予定！

# 彙報

(平成三〇年六月一日  
～令和元年五月三十一日)

## ▲ 人事関係 ▼

### 一、職員(教団職員)

○教師瀬戸望、一〇月一日付で助手に任命。○部長高橋昌之、四月一日付で所長職務代行者に指名。○助手須寄真治、四月一日付で所員に任命。○主事小玉さつき、五月一日付で教団に異動。○教師末永信野、五月八日付で臨時御用奉仕に採用。

### 二、研究生

平成三〇年度  
○研究生瀬戸望、九月三〇日付で委嘱期間満了。  
令和元年度  
○教徒金子信栄、橋本雄二、五月八日付で研究生を委嘱。

### 三、嘱託

○嘱託早川公明、七月二一日で委嘱期間満了。  
○嘱託河井信吉、同宮本要太郎、同土居浩、同中里巧、同斎藤文彦、七月二一日で委嘱期間満了。翌七月二二日付で再度委嘱。

### 四、研究員

○研究員野中正幸、九月一〇日付で委嘱期間満了、翌九月一一日付で再度委嘱。

### 五、評議員

○評議員岩崎道與、八月九日付で任期満了、翌八月一〇日付で再任。○教師森山恵美子、八月一〇日付で評議員に任命。○評議員、高橋寛志、八月三一日で任期満了、翌九月一日付で再任。○評議員阪井澄雄、一月三一日で任期満了、翌二月一日付で再任。  
※五月三一日現在

所長一名、部長三名、幹事一名、所員二名、助手三名、事務長一名、主事三名、臨時御用奉仕一名、研究生二名(計一七名)、嘱託七名、研究員八名、評議員四名。

## ☆ おめでた ☆



出産  
○所員山田光徳・光世夫妻に、六月二八日、二男眞佐飛くん誕生。

## SAKAMICHI

今号も無事発行することができました。執筆のお願いを快くご承引頂き、寄稿して下さいました皆様にお礼を申し上げます。

さて、本所の客殿、洋館、付属舎は、一月一日に、国の登録有形文化財に登録され、二月八日には、登録証伝達式が挙行されました。

本所の施設は、歴史的建造物であるだけに、毎年のようにどこか手が入っています。昨年も洋館屋根の雨漏り修理や事務室床の張り替え工事を実施しました。この施設を次の世代に大切に引き継いでいくためには、欠かすことのできない重要な営みだと思います。

本年は、立教百六十年のお年柄であるとともに、改元の節年です。現在、世界中で元号を使用しているのは日本だけです。日本人は和暦と西暦という二本立ての時間認識の世界を生きていることになりました。煩わしさがある一方で、見方を変えれば、それは認識の幅を広げ、思考の多様性を担保することにもつながらないでしょうか。

歳月を積み重ね、思考を硬直化させるのではなく、認識の質や内容が多様な深みを持ち、「節年を境に年まさり代まさりの繁盛のおかげを受けることができる」ようでありたいと願っています。  
(た)

発行・印刷 金光教学研究 所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話 (〇八六五) 四二一三一一七

FAX (〇八六五) 四二一三一一九

<http://www.konkokyo.or.jp/kyogaku/index.html>